

暁の大地  
6

成尾  
陽

目次

九、人生の目的◆ 7

愛善の心 ◆ 7

変わりゆく世の中 ◆ 17

子育て ◆ 26

自然破壊のツケ ◆ 36

皆神山 ◆ 46

石の宮 ◆ 56



この小説は、大本のみ教えをドラマ風に書き下ろしたもので、平成二十二年と二十三年の機関誌「おほもと」と、平成二十四年以降の機関誌「みろくのよ」に連載したもので、登場人物の多くは実在の人物ではありません。

暁の大地  
6



## 九、人生の目的

### 愛善の心

「おめでとうございます」

大地は実家の玄関のドアを開け、声を掛けた。

「いらつしや〜い」

奥から明るい声がし、京子が小走りに現れた。

「ソウ君、よく来たね、おめでとう。寒かったでしょ」

大地の手をしっかりと握って、恥ずかしそうにはにかんでいるのは、二歳になった大

地の長男・蒼汰朗そうたろう、つまり京子の孫である。

「お母さん、あけましておめでとうございます」

「おめでとうございます、芳さんかおる。また降ってきたみたいね。さあ、上がって」

「はい、おじゃまします。少し積もりそうですね。蒼汰朗、長靴を脱いで」

芳の声で蒼汰朗は玄関に腰掛けて上手に長靴を脱ぎ、腹ばいになって靴を直した。

「お、たいしたものだ。偉いな蒼汰朗は」

遅れて出てきた大地の父・剛が、孫の頭をなでた。

「お父さん、おめでとうございます」

芳が笑顔であいさつした。

芳は雨宮家に嫁いで四回目の正月を迎えていた。大地と結婚したのが平成二十九年六月、一年後に蒼汰朗を授かった。令和三年の新年で二歳半になった蒼汰朗は、目がクリツとした端正な顔立ちで、ようやく片言の単語で会話らしいことができるようになりつつあった。かわいい盛りである。

「はい、おめでとうございます。それにしても芳さんの躰しつげがいいんだな、この年で靴をそろえられるとはね」

「いえ、気まぐれで、いつもできるわけじゃないですよ」

芳がうれしそうに言うと、蒼汰朗は立ち上がって京子の手をつかみ、催促するよう  
に奥へ向かって行った。

今年の正月は、雨宮家全員で顔をそろえることができず、新型コロナウイルスの影



響がここにも及んでいた。

師走に入り、第三波の感染拡大が広がり、東京で美容師として働く大地の妹・ちあきも両親を気遣い、長野への帰省を断念した。

「早く会いたいけん、今は帰らんでいいけんね」

帰省を迷っていたちあきは、このフレーズをテレビニュースで知り、温かみのある表現に共感し、正月休みは東京に残ることにしたのだった。

この言葉は、島根県の広聴広報課がゴールデンウィークに向け企画し、昨年四月末に山陰中央新報に掲載した新聞広告で、「第四十回新聞広告賞」に選ばれた出雲弁のコピーである。そこには「県外に住むあなたが大切だと想うひとに、どうかそんな言葉をかけて欲しい。そのひとを守るために今は会わないことにしませんか。…近いうちに、いつも通り会える日が必ず来ます」とメッセージが添えられていた。

「なるほどなあ、と思ったちあきは、父の「心配ない、大丈夫だから帰ってこいよ」とのLINEメッセージに、「高齢者一人のためだからね」と返信していた。

「高齢者って七十歳以上じゃないのか？俺はまだそんな年じゃないぞ」

剛は、ちあきが帰省しない理由を大地に愚痴った。

「まあ、お父さんも去年還暦で会社を定年になったし、もう孫もいるおじいさんだから、そろそろあらがわれないようにした方がいいかもね」

大地が言った。

「こんなかわいい孫がいるんだから、そうなんだろうけど、なんだかな」

「お父さんは認めたくないもんね。私はまだ還暦まで数年あるから、当然高齢者じゃないわよ。でも、蒼汰朗に『バアバ』って呼ばれるとうれしいけどね」

京子が笑いながら言った。

「まあまあ、新年早々、年の話ばかりじゃつまらないから…。さあ、乾杯しよう」  
剛が話を変えた。

「では、あらためて。新年、あけましておめでとございます」

剛の発声に、それぞれが「おめでとございます」と唱和した。

「おめでと…」

蒼汰朗のはにかんだ声も聞こえ、笑いが起こった。

「すごい、おめでと…って言えるんだ」

大地の弟・司が驚いた様子で言った。

幼子が一人いるだけで、その場の雰囲気が大きく変わる。まさに天使のような存在である。主役の蒼汰朗を中心に、兩宮家の居間にはぎやかな新年会となった。

両親と弟、妻と長男。妹がこの席にいないのは残念だが、大地は家族六人が元気で新年を迎えられたことを、心からありがたいと感じ、おのずと笑顔になった。

「綾部のおじいちゃんとおばあちゃんも元気だったよ」

大地は今朝、祖父母の梅木松太郎とともに電話をし、新年のあいさつを交わしたことを報告した。

「あら、そう。私、まだ連絡してないわ。またあとで電話しないとね。」

「そういえば芳さん、亀岡の天恩郷は、麒麟きりんがくる」の大河効果で、参観者が増えて  
いるそうね」

「そうらしいですね。うちの両親も先月お参りに行ったようですが、ちょうど日曜日で、大勢の人でにぎわっていて、びっくりしていました」

芳が自身の実家を通しての情報を伝えた。

「コロナの影響で、放送が一時中断したけど、今回の大河ドラマはなかなか面白いな」  
剛が言った。

「その分、期間も延長するらしいね。確か二月七日まで延びるそうだよ。大河ドラマは放送が終了してからも、“大河ロス”とか言って、しばらくゆかりの地は観光客でにぎわうらしいね。だから、本能寺の変の起点になった亀山城址（じょうし）の大本は、これから春にかけて人が多くなるんじゃないかな」

大地は、光秀時代の石垣の一部が残る天恩郷の神苑風景を思い浮かべていた。

「叛逆者、謀反人と言われ続けた明智光秀が、今回は英雄のように描かれているのが斬新だね。十一月ごろの放送だったか、比叡山焼き討ちの前後、特に天台座主（ざいす）の覚怒（かくじよ）の悪役ぶりが秀逸だったな。それに今回の大河は、信長や正親町天皇（おほぎまち）、摂津晴門（せつづはるかど）や松永久秀、最初のころだったら齋藤道三とか、脇役がそうそうたる顔ぶれで、見応えがあるよね」

「司は、やけに詳しいな」

大地が感心した。

「それにしても、天台座主（ざいす）や僧侶をあんなふう（ふう）に悪役で描かれたら、延暦寺の人たちは嫌だろうね。私、ちよつと心配しちゃうわ」

「そうだよね」

大地も同調した。

「俺も思ったな。ひよつとしたら、比叡山がNHKに抗議を入れるんじゃないかと心配になったね」

剛が相槌を打った。

「それが違うんだよ。何かの記事で読んだんだけど、天台宗の役員の人コメントが紹介されていてね。正確には憶えていないけど、大河ドラマの比叡山焼き討ちの描写に関しては、あくまでもドラマなので、比叡山としては「怨親平等」の思想から、いちいちコメントはしませんと書いてあったんだよね」

大地が説明した。

「おんしんびようどう?」

司が訊いた。

「怨親平等っていうのは、恨み敵対した者も、親しい味方も、分け隔てなく同じように扱うってことらしいね」

「なるほど、中東紛争のように、報復の連鎖はしないということか」

「それに比叡山延暦寺では毎年、信長による焼き討ちの犠牲者を供養する法要を行っ

ていて、その法要の鎮魂塚には信長の遺品も納めてあって、敵味方同じように追悼しているそうだよ」

「さすが天台宗だ、懐が深いな」

剛が頷きながら言った。

「もう一つ、感心したことがあってね」

大地は真面目な顔になった。

「毎年、延暦寺のお坊さんたちが托鉢をするでしょ」

「ああ、寒行托鉢だな」

「そうそれ、年末にお坊さんたちが比叡山から町へ下りて、寒い中を托鉢に歩いて、お布施を集めるんだよね。でね、去年はその浄財の一部を、NHKの歳末たすけあい

に寄付したそうだよ」

「えっ、NHKに……。やるね」

剛の声が大きくなった。

「でも、大本にも同じような考え方がありませんよね、お母さん」

芳が京子に言った。

「えっ、そう、そうね、あつたよね」

「確か、讚美歌の中にあつたな」

大地が助け舟を出した。

「責めらるる苦しき身にも虐ぐる

仇を愛する心たまはれ

「おんしんびよう 怨親平等どうつていう言葉聞いた時に、僕はこのお歌が浮かんできたなあ」

「あだ 仇を愛する心か…、なかなかできることじゃないけどな」

剛が腕を組んだ。

すると京子も思い出したように短歌を口ずさんだ。

「そっいえば、

にら 睨まれてにらみかへすは人ごころ

笑ふてかへすは神かみしんこう心なる

という聖師さまのお歌もあつたわ」

「そのお歌、ステキですよね」

「でも、自分がそんなふうに見えるかどうかは別だけどね」

京子は芳と目を合わせてから、剛の方に目をやった。

剛は、笑って返されたらかえって怖いぞお……と言わんばかりに、肩をすくめた。

「見直し聞き直し……、大本も天台宗も、要は『愛善の心』だよ。お正月だし、めでたし、めでたし……、としようね」

「フツ、お兄ちゃん、うまくまとめたね」

司がちやかすように言った。



## 変わりゆく世の中

「そろそろ時間かな」

そう言って司がリビングを出て行き、程なくパソコンを持って戻ってきた。そのままテレビの前で何やら操作して、パソコンを設置した。

「では、今からオンライン新年会を始めます」

「おっ、ちあきが参加するのかな？」

大地が訊いた。

「そうそう。今、Zoomで招待しているから、しばらく待って」

「それにしても、去年のコロナ禍から急速にネットを使うことが増えたよな。司もリモートワークが増えたって？」

「そうなんだよ。うちの銀行でも出勤は二日に一回のペースになってきて、働き方も一変したね」

司は大学卒業後、長野市内の地方銀行に勤務。営業担当で、お客さまとの接し方に、苦慮しているという。

「リモートワークもいろいろ制約があるし、お客さんも年配の人が多から、ネット

だけに頼るわけにもいかず、何かと難しいね」

「司はいろいろ大変みたいね。でも、私は良いこともあったわよ。おかげで聖地での大祭や月次祭がライブ中継されて、自宅からお参りできるようになったしね。ありがたいわよ」

京子がうれしそうに言った。

「そうですよね、お母さん。ネットを通じてお参りできるようになるなんて、一年前までは考えてもいませんでした。土曜の夜の、新型コロナウイルス終息オンライン一斉祈願”も、全国の人たちと一緒にお参りできるようになりましたしね」

「そうよね。私もスマホを通してご祈願させていただいているけど、あの一斉祈願には、何人くらい参加しているのかしらね？」

「年末に本部の知り合いに聞いたんですが、大体毎回、百アカウント前後らしいですね。でも昨年の最後、直心会が担当の時には、三百くらいになったそうですよ」

「え、さすが直心会だわ」

「お母さんも、ユーチューブやSNSができるようになったんだね？」

大地が訊いた。

「まあ、何とかお父さんに教えてもらいながらね。お父さんが、ユーチューブの大本公式チャンネルを登録してくれたしね」

「えっ、そうなの？」

大地が驚いたように言った。

「そんなに驚くことでもないだろう。まあ、成り行きでね」

京子の夫・剛は、大本信徒ではないものの、大本については理解を示していて、何かと京子に協力してくれている。確か暮れには二万を超えていたんじゃないかな

「チャンネル登録者も増えているよな。確か暮れには二万を超えていたんじゃないかな」

剛が言った。

「そうだよ。もう二万一千になっていたね。そのほとんど、二万人くらいが一般の人らしいよ」

「ほく、そりやすごいな。たいしたもんだ。確かにコンテンツの数もそこそこあるし、中身の質は高いと思うな」

「そうですね。特に聖師さま・出口王仁三郎のネームバリューは高いので、関連動

画から大本の映像を見にくる人が多いんですって。それと霊界、目に見えない世界のことについて知りたい人が増えているような感じですね」

芳かおるが答えた。

「こういう先の見えない時代だから、死後の世界に興味を持つ人が増えているんだろうな」

「そうだね。霊界を紹介した『この世の向こうに』というアニメは、一年前まではアクセス数一万くらいだったのに、コロナ禍で一気に増えて、もう八十二万回を超えているもんね」

大地は登録者数の急増に驚いていた。

「パソコンとかに疎うとい私の両親ですら、最近ではタブレットを使い始めて、ユーチューブの動画を見るようになったんですから、時代は進みましたね。それとLINEラインのビデオ通話で蒼汰朗そうたろうの様子が見られるのが楽しみのようです。必要に迫られると、人間できるものですね」

芳もネットを通じて両親に孫の姿を送れることがうれしく、こんな世の中にあって、新しい手段を使い、環境に順応できることも神さまのお恵みだと感じていた。

「大本讃美歌の中のお歌に、今の私の心境にぴったりだなと思ったのがあったんですよ。

やはりゆく世に生まれ来て皇神の

恵みにひたるは嬉しからずや

(大本讃美歌第一〇二)

というお歌なんです」

「本当に今は、変わりゆく世の中だね。でも、芳さんのように何事もプラスに捉えていけないとね」

「はー」

芳は京子に共感してもらい、うれしそうに返事した。

「おっ、お姉ちゃんが入ってきた」

司がパソコンを操作した。

「あけましておめでとうございます」

テレビ画面の向こうのちあきが笑顔であいさつした。

「おめでとうございます」

兩宮家の全員が、声を合わせるように応えた。

「みんな元気？ あ、芳さんお久しぶりです」

「お久しぶりです。ちあきちゃんも元気？」

「はい、めっちゃめちゃ元気。年末が忙しかったんで、今朝はゆっくり寝てました」

「お客さん、多かつたんだ？」

「コロナがはやりだしたころは、足が遠のいたけどね。でも、みんな髪は伸びるから、徐々に戻ってきたの。それに多くの常連さんは来てくださったんで、ありがたかったわ」

「そりゃ、良かったな」

剛が安心したように言った。

「ホント、美容室ってお客さんと密になるし、仕事が減るのかと心配していたからね。良かった、良かった」

京子もテレビ画面のちあきに向かって言った。

「確かにそうよね。寒い間はコロナも減りそうにないから、あったかくなったら帰ってらっしゃいね。みんなちあきにカットしてもらおうのを待っているから」

「そうだね、春になったら一度帰れるかな」

ネットを使つての画面越しでのやり取りだが、互いがそばにいるかのように、スムー

ズに会話ができる。しかもほとんど費用はかからない。便利な世の中になったものである。

蒼汰朗が興味深げにテレビに向かって歩み寄った。

「あつ、ソウタロウ」

ちあきが手を振った。

「ほら、ちあきおばちゃんだよ」

「違う、チーねえちゃんだからね」

ちあきが、大地の呼び掛けに反論した。

「蒼汰朗、ほら」

芳が何かしゃべるように蒼汰朗に耳打ちすると、蒼汰朗は恥ずかしそうに小さな声で、おめでどう…と言った。

「うわ、すごい、もうしゃべれるんだ、おめでどうソウ君。アツ、そのトーマス気に入っ  
たかな？」

ちあきがクリスマスプレゼントで贈ったおもちゃの機関車を、蒼汰朗はしっかりと握りしめていた。

「すつごく気に入ったみたいで、毎日これで遊んでるのよ」

「ほんと、良かった。ありがとうね、ソウ君」

画面のちあきを含め、兩宮家全員での新年会はにぎやかに進み、話に花が咲いた。

「そうだ、大地たちも人型を書いておいてね」

「了解、また書いて持つてくるね」

大地が言った。

「お母さん、私の分は書いておいてね」

ちあきが画面から話し掛けてきた。

「あと、アパートと自転車もお願い。いつもなら人型に書いてから体を撫でるんだけど、今年は無理だね」

「その分、お母さんが真心込めてしっかり書かせてもらおうからね」

「お願いします」

二人の会話を聞いた芳が、あの…と京子に訊いた。

「人型で体を撫でるんですか?」

「いえ、別に撫でなくってもいいんだけどね。今回のちあきのように代筆でもいいわ



けだから、必ずそうしなさいということじゃないのよ、芳さん」

「そうなんですネ」

「私は子供のころから、父に言われていたことを習慣でしていたものだから…」

「どんなふうによ？」

「人型に息を吹きかけて全身を撫でていたのよ。時には一晩、枕の下に敷いていたこともあったの。それをうちの子供たちが小さいころからさせていたので、一年に一回のことだけど習慣のようになっていたのね。特に頭は念入りに撫でて、賢くなりますように…つてね」

「そうなんですか、じゃあ、今年は私もそうしてみます。蒼汰朗にも」

「そうね、それがいいわね」

「でも、コロナ禍の今だからこそ、大祓はらいって大切ですね」

「本当にそうだと思うわ。疫病退散…、大難を小難に、小難を無難に…。節分にはしつかりお祓はらいしていただきましょうね」

「そうだ、芳は、人型用紙の中に書いてあるマークは何か分かるかな？」

大地が芳に質問した。

「あの象形文字のようなもの。そういえば、何かなと思ったことはあつたけど、意識してなかつたかも」

「あれはね、しゅうへい修祓の二文字をつなげて書いてあるんだよ」

「へえ、そうなんだ」

二人の会話を耳にし、京子が近くに置いていた人型用紙を芳に手渡した。

「あつ、ホントだ。何となく分かる」

「芳さん、それ、私の受け売りよ」

「なんだ、そうなの」

芳の反応に、大地は苦笑いした。

## 子育て

「人型用紙の修祓しゅうばつ マークもそうだけど、人間って見慣れすぎてしまうと、気にも留めていないことって多いものだよ。同じように、当たり前前あたりまえのことが、本当は当たり前じゃない、ありがたいことなんだということを、つい忘れてしまっているなあ。今のコロナ禍で、みんながそのことを感じるようになったんじゃないかな」

剛がしみじみと言った。

「そうですね。本当なら、今ここにちあきちゃんがいるのが当たり前ですものね」

かわる  
芳が言った。

「そうそう、私もそう思う。いつもなら、そこでみんなとおせちを食べているはずだもん」  
画面の向こうからちあきが発言した。

「でもね、こんな状況だから、忘れていたことに気付かされることもあるのよね」

「えっ、何？」

「先月の二十日ごろだったかな、職場から帰る電車の中で高校生の男の子たちの会話が耳に入ってきたのよね。その子、いつもならお正月は離れて暮らすおじいちゃん、おばあちゃんのところに行くはずで、楽しみにしていたよね。もちろんお年玉をもらえるっ

てこともあるようだったけど。でも、今年はコロナで東京からは行けないって言うの」

「ちあきちゃんと同じね」

「で、その子偉いのよ。今まで書いたことなかったけど、今年初めておじいちゃん、おばあちゃん宛てに年賀状を書いたんだって。うちみたいにオンラインはできないから、せめて年賀状くらいはって。ね、イイ話でしょ。私、その会話を聞きながら、コロナでつらいことも多いけど、良いこともあるんだなって思ったわけ」

「へえ、孫から年賀状を受け取ったおじいさんとおばあさんは、今頃きつと喜んでるでしょうね」

芳がちあきの話に顔つなきながら応えた。

「そうだ、うちも届いているかな？」

おせち料理の里芋を頬張っていた司は、箸を置いて席を立ち、ほどなく戻ってきた。

「また雪が降ってきたよ」

そう言いながら司は年賀状の束を剛に渡した。

「お父さん、うちの年賀状は蒼汰朗せうたろうの写真だからね」

大地がすかさず言った。

「おっ、そうか、じゃあそれだけ見せてもらおうかな」

剛は年賀状をめくった。

「あつた、あつた。こりゃかわいいな、ほら」

剛は相好を崩しながら、京子に手渡した。

「あらホント、良い写真」

「かわいいね、蒼汰朗」

司が京子の手元をのぞき込んだ。

「私にも見せてよ」

画面のちあきがじれったそうに言った。

「はいはい」

司が年賀状を受け取り、パソコンのカメラに向けた。

「ホント、良い写真だね」

「ちあきにも送ったはずだよね、芳」

「はい、送りましたよ」

「たぶんまだ届いていないと思うから、楽しみ」

「ほら、誰だ？」

司が年賀状の写真を蒼汰朗に見せた。それが自分だと分かったのか、蒼汰朗は写真を指さして恥ずかしそうにした。そのしぐさが愛らしく、みんなの笑い声がリビングに広がった。終日、雨宮家には和やかな時が流れた。

三月、北アルプスの山々には雪が残り、平地の梅のつぼみもまだ堅い。それでも確かに春は近づいている。

大地は結婚後、実家から出て長野市内で芳との新居を持った。取りあえずアパートを借り、新婚生活をスタートした。

東川芳との最初の出会いは六年前、聖地での大道場修行だった。当時大地が二十八歳、芳が二十五歳。その時は、互いに相手を意識してはいなかったが、その後、大祭参拝などで聖地で会う機会が重なり、次第にお互いが気になる存在になっていった。

電話やLINEでの交流はもとより、長野と静岡というそう遠くない距離も幸いし、たびたび会う機会を作った。一年ほどの間に二人の仲は深まり、二年足らずでのゴールインとなった。

大本の信仰家庭で育った芳だったが、大地同様、青年部活動に積極的に参加していたわけでもなく、信徒籍もなかった。しかし、大道場修行での出会いであったことから、神さまがご縁を結んでくださったのだと感じていた。大地も同じ気持ちだった。

二人の間では、大本のことをはじめ共通の話題も多く、次第に互いの価値観が近いことを感じていた。何より一緒にいて心地よかった。

結婚を前に二人はそろって大本に入信し、天恩郷・万祥殿で華燭かしやくの典を挙げた。これには大地の母・京子、そして何より綾部の祖父母が大層喜んでくれた。

芳の両親、それに大地の祖父・松太郎の勧めもあって、自宅にはご神号幅を奉斎することになり、新婚生活のスタートとともに、信仰生活も始まった。

まずは、朝夕拝の励行。一日の始まりに二人そろって神さまに手を合わせて、夕食前に一日の感謝をささげる。大地は、自分一人だと長続きしないかも…と思ったが、芳と二人だと意外と続けられた。

しばらくするとニューフェイスが加わり、家族三人での楽しい日々が続いた。仕事で嫌なことがあっても、蒼汰朗の笑顔を見ると疲れも吹っ飛び、癒やされている自分があった。子供の力はスゴイ！と実感する。蒼汰朗のおかげで親となり、自身の両親に対する気持ちにも変化を感じるようになった。

芳は実家のある静岡で蒼汰朗を出産し、長野に帰ってからは、子育てに専念している。初体験で分らないことばかりだったが、何か悩みがあると京子に相談することがしばしばであった。

「子供が三歳までは、楽しいことばかりよ」

ある時、京子は『寸葉集』を手に、三代教主さまのお示しを紹介してくれた。

母（二代教主）は、こんなことを言っていました。

「わたしは子どもに孝行などしてもらおうとも思うとりません。子どもの小さい時に、子どもを育てることで充分楽しませてもらいましたので」と。

乳児が知恵づきつつ成長してゆく課程の愛らしさ、そして大人になってゆく美しさ、おもしろさを、母は大きな愛情をもってよく見、よく味わいつつ、苦しみもまた楽しみとして育ててきたことだけで充ち足りていたのでしょう。

母のこの言葉のもつ深い含蓄と、ただならぬ偉大さに頭のさがる思いがいたします。

「芳さん、今はしっかり子育てを楽しむのよ。小さいうちはね、ちょうど子供に、楽し



みや喜び」という借金をしているようなものだからね。子供が大きくなるにつれて何らかの苦勞は必ずあると思うけど、その時は、その借金を返済していると思えばいいのよ。それに時々、ボーナスもあるしね。私にとって、あなたたちの結婚は大きなボーナスだったわ」

芳は京子のアドバイスに助けられ、気持ちが出来になったこともたびたびであった。

♪ピンポーン

インターホンのチャイムが鳴った。蒼汰朗が反応して、真つ先に玄関へ向かってちょこちょこ走った。

「蒼汰朗、誰かな？」

後から付いて来た芳が玄関のドアを開けた。

「やー、蒼汰朗、こんにちは」

蒼汰朗は素早く芳の後ろへ回り、芳の陰から司の顔をじつと見た。

「あら、恥ずかしいの。ほら、司おじさんよ」

「だから、芳姉さん、おじさんじゃなくて、司兄さんと教え込まないとダメだよ。でも、マスクしているから分からないかな」

司は、おじさんと呼ばれることに妙に抵抗していた。

「これ、野沢菜」

「ありがとう、うれしい」

京子から頼まれて、司が自家製の野沢菜漬けを届けに来たのだった。

「で、これは…」

とポケットから小さな車のおもちゃを取り出し、しゃがんで蒼汰朗の目の前に差し出した。蒼汰朗は急に笑顔になり、車をつかんだ。

「あら、もらったらどうするの」

蒼汰朗はニコニコしながら、小さく頭を下げた。そのしぐさがかわいく、司は蒼汰朗の頭をなでた。

「どうぞ、上がって」

「はい、お邪魔します」

司が奥へ進んだ。

「司、いらっしやい」

大地が顔を出した。

「野沢菜を届けていただいたの」

「そっか、ありがとう。ま、どうぞ」

大地がリビングに誘い入れた。

「ここへ来たの、半年ぶりかな？」

司がコートを脱ぎながら言った。部屋にはコーヒーの香ばしい香りが立ち込めている。

「えっ、そんなになるかな」

「去年の秋以来だと思っよ」

「コロナで会う機会も少なくなったからな」

「それもあるよね」

二人は芳が入れたコーヒーを飲みながら、兄弟で近況を語り合った。すぐそばでは蒼汰朗がお気に入りの機関車のおもちやと、さつきもらった車で楽しそうに遊んでいる。

「そうそう、夕べね、すごく面白いというか、興味深い映画を見たんだけど、お兄ちゃんは何知ってるかな？」

「ん、何ていう映画？」

大地が訝しげに訊いた。

## 自然破壊のツケ

「『コンテイジョン』というアメリカ映画なんだけどね」

「コンテイジョン？」

大地が司に聞き返した。

「まるで今の新型コロナウィルスの感染拡大を予言したような映画で、しかも十年前に制作されているんだ」

「へえ、そんな映画があつたのか。もう一昔前になるけど、日本にも国内で未知のウィルスがまん延したストーリーの『感染列島』という映画があつたな。確か英語版のタイトルが『パンデミック』。僕も半年くらい前にネット動画で見て、今のコロナ禍を思わせる現実味があつて、びつくりしたことがあつただけどね」

「それ、僕も見ただよ」

「なんだ、そうか」

「でも、コンテイジョンは、もっとリアルに今の世界の感染の様子を連想させる…と  
いうか、そのまんまという印象なんだよ。マット・デイモンが主演で、ジュード・ロ  
ウや大勢のハリウッドスターが出演していてね。新種のウィルス感染が目を追って世

界中に拡大していく恐怖が、とにかく現実味を帯びて伝わってくるんだ。日本での感染の場面もあつて見応えあつたよ」

司が真剣な表情で話を続けた。

「司、タイトルの“コンテイジョン”の意味は？」

大地がコーヒーを飲みながら訊いた。

「確か、伝染」

「そうか、面白そうだな。僕も見てみようか」

「見ておいて損はない、お薦めの映画だよ。当初アメリカでは、せつかく豪華なスターを集めたのに地味すぎる」とか「単調で飽きた」となんていうレビューも多かったようだけど、今は大注目されて、「リアリティーがありすぎて怖くなった」という評判で、僕も見ていて怖いくらいだったよ」

司が顔をしかめた。

「この手のハリウッド映画にありがちなアクションやラブシーンはないんだけど、ストーリーがよく考えられていて、パンデミックの二日目から、淡々と時系列に追って

いるんだ。この二日目から始まるのがミソでね。日を追って、いくつかの視点で感染の進行状況を描いているんだ」

「その一つに日本でのシーンもあるわけだな」

「そうそう、日本では路線バスの中で感染者が発症するという想定だったね。実際の新型コロナウイルスよりもかなり速い感染スピードだけどね」

「そうなのか」

「映画の最初は、マット・デイモンの奥さんが感染して死んでしまい、追い打ちをかけるように小学生の息子も亡くなってしまふ。でも、父親と娘にはたまたま免疫があったのか、感染しないんだよ。それとか、患者の対応に追われる医師が感染したり、防護服を着た作業員がゴーストタウン化した市街地を消毒するシーン、無人の量販店で品物を略奪する暴徒化した住民なんかの場面は、去年世界のあちこちで報道された光景と同じだ…と思ったな」

司が詳しく映画の内容を語った。

「あら、二人とも真剣な顔ね」

芳かおるがお茶とお菓子かおるを運んできた。

「面白い映画の話ですよ」

「ちよつと聞こえていたけど、なんだか怖そうね」

「ホラー映画じゃないですよ、でも違う意味で怖いです」

「私、怖いの手」

「芳は怖がりだから見なくていいよ」

「あら、大地君は見るつもりなの」

「たぶん……」

大地が小声で言った。

「じゃあ、一緒に見よつかな」

そう言いながら芳は、お茶とお菓子を司の前に置いた。皿に盛られた三色団子を目ざとく見つけた蒼汰朗そうたろうが、おもちゃを置いて近づいて来た。

「これはダメよ。蒼汰朗は、こつちね」

芳が小さく切ったバナナをテーブルに置くと、蒼汰朗はすかさず口に頬張った。

「ん、このお茶は、えんめい茶かな？」

司が湯飲みを持ったまま訊きいた。

「さすが、司君。よく分かつたわね」

芳が感心して言った。

「これ山野草のお茶で、カフェインが入ってないから、蒼汰朗にもいいよね」

「そうなの。お母さんから教えてもらって、蒼汰朗も時々飲んでるのよ」

「そうだったんだ」

司は、出された三色団子の串を持ち、一つかじった。

「ねえ司君、三色団子は『飽きない団子』だって知ってる？」

芳が訊いた。

「飽きない、ですか？ いや知らないです。おいしくって飽きないっていうことですか？」

「ハズレ」

「え〜」

「どうしてか、知りたい？」

「はい」

「芳、じらすなあ…」

大地が笑いながら言った。



「実はこの団子の色が由来なのよ」

芳が団子を指さした。

「色？」

「このピンクは桜色で春を表し、白は雪で冬を表すんだって。で、緑色は新緑で夏。ということはない？」

「春・夏・冬か、ということは、秋がないですね」

「そう、秋がないから…」

司が頭をひねった。

「そっか、秋がない”から、あき・ない、飽きない”ですか」

「正解！」

「なんだ、ダジャレじゃないですか」

「まあ、そんなところね。でも、飽きないは商売の“商い”にもつながるから、それこそ縁起が良いのかもね」

それを聞いて大地が話に割り込んできた。

「ついでに言うと、入り口に、春夏冬中<sup>なか</sup>という札を出している店があるんだけど、これはどういう意味でしょう？」

司が腕を組み、しばらくして答えた。

「分かった、秋なかない中だから、商ちゆうい中」

「ご名答。営業中ってことだな」

「なるほど、勉強になりました。では、冬と夏を頂こうかな」

司は団子を食べ終わって、映画の続きを話し始めた。

「コンティジョンでは、感染の恐怖と戦う難しさ、偽情報によるパニック、都市封鎖、医療崩壊、ワクチンの入手争いといった場面が続くんだ。グローバル化で世界が狭くなったことも伝わってきたよ。この映画を見てから今の世の中を見ると、現実がまるで映画の続編かと思えるくらいなんだ」

「なるほどね。グローバル化の流れは止まらないよな。二十年ほど前にSARSがアジアやカナダを中心に感染拡大したけど、幸いにも日本には入ってこなかった。MERSもヨーロッパでは広がったけど、日本は大丈夫だったんだ。でもそれ以降、世界は急速にグローバル化が進んで、今は国境を越えるのもアツと言う間で、今回の新型コロナウイルスは瞬く間に、全世界に広がったわけだからな」

大地が真剣な表情で言った。

「そうだね。それにしてもこの映画を十年も前に制作していたことに驚いたな。当時、なぜ日本であまり話題にならなかったのかと思ったら、日本は東日本大震災の渦中だったからみたいだね」

そう言って司はしばらく考えてから、話を続けた。

「どうしようか、映画のラストは、これから見るお兄ちゃんには言わない方がいいかな？」

司がわざと独り言のように言った。

「いいよ、ここまで詳しく解説してくれているし、どうせしゃべりたいんだろ。僕もいつ見られるか分からないしね」

大地が見透かしたように言った。

「バレた？」

司は、じゃあと言ってお茶で口を潤した。

「憎いのが映画のラストなんだ。ストーリーがパンデミックの二日目から始まっているって言ったでしょ。で、最後に感染の一日目、パンデミックの原因が映し出されるんだ」

「なるほど」

「感染の始まりは武漢じゃなくて、香港っていう設定なんだけど、ウイルスの由来は、なんとコウモリで、家畜の豚にウイルスが運ばれ、その豚を通して人間に感染するという起源だったんだ。でもね、そのシーンを見て、"エッ、こんなことから" って思ったんだ。日常のささいな出来事が、ウイルスの発生源なのかと思うと、正直ゾツとしたな」

「へえ、そうなのか。確か、"感染列島" も似たような想定じゃなかったかな。南洋のどこかのジャングルのコウモリだったような気がするな。結局、人間が経済優先で森林を伐採し続けていったツケが回ってきたということだよ。経済繁栄の裏側では、大きな犠牲が払われている」

「そうだね、二つの映画の内容は、人間のエゴや欲望、自然破壊への警鐘ということだね。でも、僕ら自身の問題でもあるな」

天井を見上げながら、司は自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

「大本の聖師さまは、

大三災小三災の頻発も

人のこころの反映なりけり

というお歌を詠んでおられるんだけど、僕は最初、あまりピンと来なかつたんだ。でも、今回のコロナ禍で理解できるようになった気がする。感染症は小三災の飢病・戦の病に当たるだろ。自然破壊も経済優先も、利便性や金品を求める人間の心にあると思うと、このお歌の意味がストンとおなかに入つた気がしたんだ」

「確かに、そういうことだね」

司が同調した。

「人類の行き過ぎた開発が、自然の奥に潜んでいたウイルスとの接点を生んで、それが今のコロナ危機につながつたのかもしれないなあ。だから、今のうちに過ちに気付いて、根本的な反省に立たないと、この子らの未来が心配になってくるよ」

大地は、傍らで無邪気に遊ぶ蒼汰朗に目をやった。

## 皆神山

今年は全国的に、例年より早く春がやって来た。信濃路でも三月の末から桜の開花が始まり、四月に入るとあちこちの桜の名所から満開の便りが届いた。しかし、新型コロナウイルス感染症再拡大への懸念から、桜の下での宴はどこも自粛。長野市の隣、須坂市にある臥竜公園の「さくらまつり」も、開催されたものの期間短縮、夜桜ライトアップも中止となった。

大地たち親子も、臥竜公園内を歩きながら桜を愛で、しばしの春を楽しんだ。

今年は芽吹きも早かった。桜が散るのを待たずに若葉が萌え、四月末には残雪の北信五岳と新緑が、鮮やかなコントラストを呈していた。

大地一家は、週末を利用し車でのハイキングに出掛けた。手作り弁当を持って、できるだけ人との接触を避け、近場へ足を運ぶことにした。

「さあ準備はいいかな、出発するよ」

大地が後部座席のチャイルドシートに座った蒼汰朗の様子を確認しながら言った。

「はい、大丈夫よ。お天気が良くなって、ありがたいね。蒼汰朗もうれしそう」

芳が笑顔で言った。

「では、まず皆神山みなかみやまへ向かいます」

大地は車をガレージから出した。

「皆神山は最近お参りできてなかったから、久しぶりって感じね。毎年春と秋に大祭をしていたんでしょ？」

芳が訊いた。

「そうだよ。春は長野主会だけで、秋には東海教区の各機関が協力して祭典をしていたんだ。節目の年には、全国にも呼び掛けて盛大にお祭りをしていただけけど…」

「コロナでできなくなったのよね」

「そう。この春もコロナの影響で、会長が代表で参拝しただけらしいな。皆神神社としても、境内に大勢の人が集まるのは避けたかっただろうからね」

「仕方ないわね」

「この様子だと、秋の大祭も代表でお参りするだけになりそうなんだって」

「寂しいことね。でも、家族三人なら大丈夫だよね」

「たぶんね」

皆神山は、長野市松代町まつしろまちの東南に位置し、標高六五九メートル、周囲約八キロメートルの安山岩あんざんがんの溶岩ドームで、麓からは二八〇メートルほどの高さである。頂上の皆神社近くまで、車で上ることができる。

周囲の山並みと異なり、地面から盛り上がったように独立している独特の山容から、人工物だと言う者も出てき、「太古に作られた世界最大のピラミッド」という説が起こつたくらいの珍しい山である。地元では毎年「ピラミッド祭り」なるものが開催されている。

大本にとつてはゆかり深い霊山で、聖師さまは以下のようにお示しになっている。

信濃の国松代町の郊外にある皆神山は尊い神山であつて、地質学上世界の山脈十字形をなせる地であり、世界の中心地点である。四囲は山が十重二十重とえはたえにとりかこんで、綾部、亀岡の地勢とすこしもちがわぬ蓮華台れんげだいである。ただ綾部は日本の山脈十字形をなせる地で、これはまた世界的であるだけの違いである。（『月鏡』）

「聖師さまが高熊山で修行された時、霊界に入られ、最初に連れて来られたのが皆神



山だったのよね」

「そうそう、修行中、神懸かりになって最初に連れて来られたのが富士山と皆神山で、空中から眺められたそうだよ。霊界の皆神山は実物よりはるかに大きくてきれいで、形はまったく変わらなかったんだって。聖師さまは、その時の様子を歌に詠んでおられたはずだよ」

大地が言う聖師さまのお歌が以下である。

吾<sup>われ</sup>は空ゆく鳥なれや

はるかに高き雲に乗り

世も久方の空の海

深き恵みに包まれて

高き稜<sup>みいづ</sup>威を仰ぎつつ

下界はるかに見はらせば

地上の人は自己愛に

包まれ手振り足振りを

してゐる姿の面白や

○  
神の翼に抱かれながら

魂は駿河の富士詣で

富士の高嶺にわが魂たちて

秋津島根をみはるかす

神の使は皆神山に

われを松代つれてゆく

山脈十字の信濃の国は

永遠の礎神守る

富士の高嶺や皆神山を

あとにわが魂帰り来る

眼覚ませば小夜更け渡り

峰の松風身にしみる

此処は何処よとよくよく見れば

稜威高熊巖の洞

高熊御山の四十八宝座

雪の降る夜を静座する

夜は淋さびしい松吹く風の

音も聞きえず霜が降る

寒さひだるさこらへて一人

更ふくる霜夜しもよに道みち辿る

天津御国あまつみくにも根底ねそこの国も

悟りそめたる洞ほらの中

夜風身にしむ淋しき襲ふ

飢うゑと渴のきが身に迫る

土と火水の御恩を悟り

神に感謝の涙する

(歌集『故山の夢』)

「現界の皆神山もそここの大きさだけど、霊界ではどれだけ大きかったんだらうね」  
「ん…、想像できないわ」

芳が首をひねった。

「聖師さまは、実際に皆神山に登っておられるんでしょ」

「そうだよ。確か、昭和四年かな。その時に、素戔鳴尊すさのおのみことが皆神山で比良加ひらか（平釜）を焼かれていて、それが陶器の初まりだともおっしゃっているんだって」

「ヒラカって何？」

「平たい土器のお皿のことだよ。たぶん神さまにお供えする“かわらけ”だったんじゃない」

「あの三方にのせる“かわらけ”のこと？」

「だって、土器とかいて“かわらけ”って読むでしょ」

「へえ、そうなんだ。じゃあ陶器発祥の地ということね」

「神代のことだと思っけどね」

「あつ、そういうことね」

大地の運転する車は長野市内を抜け、国道十八号線から県道三十五号線を南に入り、千曲川ちくまに架かる松代大橋を越えた。その先の上信越自動車道の高架下を潜くぐると、十数階建ての白いホテルが目飛び込んでくる。一九九八年の長野冬季オリンピックに併せて建てられたもので、何度か名前が変わり、現在はロイヤルホテル長野となっている。

平成十六年と二十一年の秋、皆神山の記念大祭に併せて行われた「皆神山ウォーク」では、このホテル前の駐車場が起点となり、教主さまと共に皆神山山上を目指した。

「ここへ来ると思い出すんだよね。あの時、僕は高一でウォーク隊に参加していたんだけど、教主さまがホテルの前で、エスペラントで出発の号令をかけられた情景が、すごく印象に残っているんだ」

大地が懐かしそうに言った。

「私も両親に勧められて、何があるのかよく分からないで参加したけど、とても楽しかったっていう記憶があるのよ」

「良い思い出だね」

「そうね」

チャイルドシートの蒼汰朗は、相変わらず機関車のおもちゃを手にご機嫌である。

松代は、六文銭の家紋で知られる真田氏の居城・松代城：別名・海津城かいしゅがあった町である。

松代城は、武田信玄が上杉謙信と戦うための拠点として山本勘助に命じて築かせた城で、千曲川のほとりという地形を生かした天然要塞だった。その後、一六二二年（元

和八)に真田信之が上田城から移って以来、真田氏十代が城主として続いた。

ほかにも幕末に開国論者として名を馳せた佐久間象山をまつる象山神社など、歴史を感じさせる城下町の風情がそこかしこに残っている。

「芳、松代が、って良い名前だと思わないか？」

「そうね、良い名前…かな？」

「ほら、松の代と書くだろ、まつのよ」

「あ、そうか、みろくの世ということね。ほんとだ、良い名前だね」

皆神山へ車で上るときには、山の反対側から頂上へアクセスすることになる。大地は山裾の左手の道を走り、住宅街を抜けて上り口へ向かった。途中数箇所急カーブがあるものの、さほどの急斜面でもなく、楽に上り切ることができる。

道中、見落としやすいのが、中腹に鎮座する岩戸神社だ。天照皇大神を祭り、皆神山ピラミッドの入り口ではないかといわれる小さな岩穴がある。その奥は謎とされている…との説明があるが、定かではない。

しばらく進むと視界が開けてくる。秋になると道の両側がスキの群生となる。車は、ほどなく山上の駐車場に到着した。

「さあ、着いたよ」

大地が蒼汰朗を車の外に下ろすと、待つてましたとばかり走りだした。

「ほら、蒼汰朗、危ないから待つて」

芳が慌てて追い掛け、蒼汰朗の手をつかんだ。三人は、入り口の随神門ずいじんの石段を上った。大地と芳が一礼すると、蒼汰朗も小さく頭を下げた。

## 石の宮

境内に入ると、少し空気が変わったような気がした。蒼汰朗そうたろうが手を振りほどこき、またチヨコチヨコ走りだしたが、数メートル進んですぐに立ち止まった。初めての場所で勝手が違うためか、少し戸惑っているようにも見えた。大地と芳かほるが追いつくと、蒼汰朗が芳の手を掴つかんだ。

正面に延びる参道の左側に社務所がある。普段は無人のようだ。

「祭員はここで着替えをするんだ」

大地が社務所を見ながら言った。

「最初にお手伝いに来た時、私もここでお茶出しをさせていただいたの。この境内には水道がないから、ポリタンクで水を運んでくるのよね」

「そうそう、祭員の手水もポリタンクで運んでいるね。お抹茶接待をするときには、たくさん使うんで大変だって言ってたなあ。みんなだんだん年を取ってくるから、駐車場からここまで運ぶのも一苦労のようだよ」

「大変よね」



社務所を過ぎると六段ほどの石段がある。蒼汰朗も芳に手を引かれながら、一段ずつ大股で上がった。上り切つてから「ワンワン」と言つて、右上を指さした。

「そう、ワンワンね」

芳が優しく言つた。

「狛犬だから、ワンワンには間違いないか」

大地も頷いた。

大地と芳は、正面の社殿に一礼した。

境内では一番大きな侍従神社である。

「ここは、実在した偉人を神さまとして奉斎しているみたいだね」

侍従神社に鎮まる侍従大神は、信州・佐久の内山城主だった内山美濃守満久の三男・下野守三郎満頭（しもつけのかみみつあき）とのこと。十三歳で鞍馬山に入つて密教を厳修し、ついには修験道を極め、のちに信濃全域の山伏の支配権を得ていたといわれている。死後、生前の姿を木像に写して侍従坊大天狗明王として祭られた。今から約四百六十年前のことである。それが明治に入つてからの神仏分離等で、侍従大神として奉斎されたという。

侍従神社前から右に折れ、さらに左に上がつて行くと、もう一つの社殿が立つて

いる。こちらが千三百年前に奉祀された熊野出速雄神社で、皆神山の本社とされ、松代の産土社でもある。熊野の名が冠してあるように、紀州・熊野権現を勧進した神社で、この地方では最古とある。ご祭神は、出速雄命、伊邪那岐命、伊邪那美命、速玉男命などで、農耕、芸術の神としてあがめられている。

熊野出速雄神社と侍従神社、そしてその他いくつかの社を合わせて「皆神社」と総称される。

大地たちは熊野出速雄神社に参拝した後、さらに右手奥へと参道を上った。少し進んだ左手の木立の中に、自然石の低い歌碑が立っている。大地たちは、歌碑の前まで行くと、蒼汰朗の目線に合わせるようにしゃがんだ。

「みずずかるしなののくにの神山にともらつどひて世をいのらなむ」

大地が歌碑の文字を目で追いながら、ゆっくりと詠み上げた。

三代教主さまが初めて皆神山に登拝されたのが昭和二十九年九月二十六日。その前夜、当時の長野支部で薄茶の接待を受けられた後、二代教主さまもお使いになったという貴人台（茶道具）に墨書されたのが、この碑のお歌である。

「すてきな字よね」

「そうだね。三代さまがご自身で詠まれたお歌を、ご自身の書で碑にすることをお許しになったのは、これだけらしいよ」

「全国でこだけってことね」

「聖師さまのお歌を三代さまがお書きになったり、一文の碑はあるようだけどね」

「ということは、とても貴重だね」

「でも、これは二代目だね。初代は、ほら、あそこ」

そう言つて大地は、今上つてきた参道の向こう下手を指さした。

「そうだ、この前読んだ『みろくのよ』誌の五月号の教主さまインタビューに書いてあつたよね」

「そう、教主さまがご就任になった年だから、ちょうど二十年前、三代さまの歌碑が心無い者によつて倒されて、その三月月後にアメリカで同時多発テロが起こつたんだ。それから世界で紛争やテロが頻発するようになったから、教主さまは、衝撃的な出来事として覚えておられると書いてあつたね」

「インタビューの冒頭でおっしゃつていたから、私も印象的だったわ」

大地と芳は、目を合わせて頷いた。

蒼汰朗は退屈してきたのか、芳に抱きついてきた。

「喉が乾いたね、お茶飲もうか」

芳はトートバッグから水筒を取り出してコップにお茶を注ぎ、蒼汰朗に渡した。蒼汰朗は両手でコップを持ち、上手に飲み干した。

「さあ、上に行こうか」

三人は参道に戻り、途中の鳥居をくぐって頂上へ向かった。歌碑からは二十メートルくらいの距離だろうか、そこには奥の宮がある。神社の境内図には、「富士浅間神社」と記されているが、大本では「奥社」とか「石の宮」と呼んでいる。

昭和四十八年、大本から献納・建立されたこの石の宮には、三代教主さまによる『おおもとすめ おおみかみ大本皇大神』のご真筆と、もともと皆神社に祭られていた木花咲耶姫命このはなさくやひめのみことさまの木製のご神像が奉斎されているという。

「このお宮は、本当は亀岡の瑞泉苑に建てられるはずだったんだって」

大地がお宮の起源を説明した。

「聖師さまがお生まれになったとこ？」

「そう、第二次大本事件まで瑞泉苑にあった石のお宮を、当時のままに復元されることになっていたらしいよ。何て言ったかな…、確か…『神聖神社』」

「それがどうしてここに立ったの？」

「さあ、僕も大道場修行で瑞泉苑参拝の時に聞いたんだけど、案内してもらった先生も理由は分からないって言ってた。皆神山に石の宮が建つ二年ほど前に、瑞泉苑での石の宮再建が機関誌で発表されていたけど、なぜだかそれが、皆神山に建てられたそうなんだ。あのお宮が事件前の神聖神社の『写し』だという当時の記事が残っているらしいね。修行では、僕が長野出身だからっていうので、そんな説明をしてくれたんだ」

「なんだか不思議なご縁がありそうね」

石の宮の周囲は、風雪を凌ぐ<sup>しの</sup>ために、立派な上屋で守られている。三人は石の宮の正面に立ち、大地の先達で天津祝詞を奏上した。蒼汰朗も二人の動作に合わせて、頭を下げたり、拍手をした。その仕草が愛らしく、芳は祝詞を上げながら笑顔になった。

神号奉称のご神名は、「<sup>おお</sup>大<sup>もと</sup>天<sup>すめ</sup>主<sup>おお</sup>太<sup>みかみ</sup>神」と「木花咲耶姫命」である。二人は心地よく祝詞を上げたが、蒼汰朗はすぐに飽きてきたようで、途中から二人の周りを歩きだした。

「上手だったね」

大地は蒼汰朗を抱きかかえ、頭を撫なでた。

「ねえ、もう、ゴルフ場はやってないようね」

芳が周囲を見渡しながらかいた。以前営業していた皆神山ミニゴルフコースのことである。

「そうみたいだね。これだけ草が生えていたら、とてもグリーンとは言えないしね」

「でも、最初にここへ来た時には、私、ビックリしたわ。だって、神聖なお宮の目の前、三方がゴルフコースだったし、祭典中にプレーしているゴルファーがいたんだもの」

「まったく霊地にはミスマッチだったよね。以前、祭典中にゴルフボールが飛んで来て、お尻に当たった参拝者もいたそうだよ」

「えっ、ホント!?!」

「いつだったか母さんが、＼こんなものはそのうちに必ずなくなるはずよ…＼って言うていたんだ。僕は、どうかなあ？　と思っっていたけど、＼予言通りになったね」

「お母さん、スゴイ！」

芳が目を丸くしながら言った。

二人は両側から蒼汰朗の手を引き、ゆっくりと参道を下りた。

「そう言えば、確か…」

鳥居から少し下ったところで、大地が左の方へ目をやった。

「これが、教主さまお手植えのコノハナザクラだね」

教主さまがご就任になって三年後の平成十六年、記念大祭の時に教主さまによって三代教主さまの歌碑の除幕がなされ、それに続いて植樹式が行われた。その時のコノハナザクラである。

この時、教主さまは、二首の歌をお詠みになっている。

貴人<sup>きじん</sup>台<sup>たい</sup>にしるし<sup>たま</sup>給<sup>たま</sup>ひし<sup>たま</sup>三代<sup>さんだい</sup>教主<sup>きゅうしゅ</sup>様<sup>さま</sup>がみ歌

五十年<sup>いそとせ</sup>めぐり<sup>いそとせ</sup>今<sup>いま</sup>ぞ歌碑<sup>かひ</sup>建<sup>た</sup>つ

皆<sup>かみやま</sup>神山<sup>かみやま</sup>の木<sup>き</sup>の花<sup>はな</sup>桜<sup>さくら</sup>永遠<sup>とこほ</sup>に栄<sup>さか</sup>え

安<sup>やす</sup>けきみ世<sup>よ</sup>を守<sup>まも</sup>らせ給<sup>たま</sup>へ

花の時期は過ぎ葉桜となっていたが、脇に由緒書きの銘板が立ち、木の周りを広く

困ってあるので、すぐにそれと分かった。

「教主さまが植樹されたのは、皆神山ウオーク隊の時よね」

芳が訊いた。

「そうだよ。僕が高一の時さ」

「私は中学生だったから所々しか記憶にないけど、根元に土をかけておられる教主さまのお姿は覚えているの。あの時は大勢の人だったよね」

「僕も、歌碑の除幕と、植樹シーンは覚えているなあ。でもよく考えたら、あれから一度も花が咲いたところは見てないんだよね。なんか、もったいないことだな」

「本当にそうよね。来年は花の時期に来ましようね」

「そうしよう。四月中ごろかな」

木花咲耶姫命が祭られているこの神山で美しく清楚なコノハナザクラを見たい…、そういう願いが大地と芳の心に湧き上がってきた。

「こんな気持ちになったことが、きつとおかげだね。それに蒼汰朗にも見せてやりた  
いしね」

皆神山を吹き抜ける薫風のように、爽やかな気持ちに満たされ、三人は楽しみに参道を下った。



（続）